



畑違いに学ぶ人事の知恵

米国人らしさと反知性主義

ポジティブ思考でビジネスに熱心なベンチャー志向、道徳を重視してやたら黒白をつけたがる……。このように語られる「米国人らしさ」は、いったいどこからやって来たのか。米国のプロテスタントを背景に生まれ、現在も脈々と受け継がれている反知性主義に、本書はその源流を見いだす。

反知性主義の誕生には、米国建国前の植民地時代にあった、極端な知性主義が前提にある。当時主流だった教派は、聖書の言葉を正しく解説するために、牧師に高い知性を求めた。「ハーバード、イエール、プリンストンといった大学は、牧師養成を第一の目的に設立されたのです」と、著者の森本あんり氏は説明する。

知性主義への反発から勃興したのが、反知性主義の原点と目されている「信仰復興運動」だ。主流派の牧師は大卒が多く、決まった教会で堅苦しい説教ばかりであったのに対し、信仰復興運動を担う伝道者は、学校を出ているか

もあやしい人たちだ。彼らは各地を巡回し、時には数万人を野外集會に集めて、平易で感動的な説教で人々を信仰に目覚めさせていった。この種の集會はTV放送へと姿を変え、「全米どこに行っても伝道集會のCATVチャンネルがある」という形で現代に受け継がれている。

「既存の権威ある牧師に批判されると、伝道者たちは『信仰は教育の有無に左右されない。あなた方こそ、イエスの批判した学者、パリサイ人の類ではないか』と反論しました」。学者、パリサイ人とは、イエスが生きた当時の学問と宗教の権威者のこと。イエスの言葉が出発点、正義は我にありと、この後「学者、パリサイ人批判」は、反知性主義の決めゼリフとなる。こういう起源をもつ米国の反知性主義だから、「その主眼は知性そのものへの反発というよりは、知性が権威をもつことへの反発となる。知性が権威を不当に拡大使用していないかチェックしようとする」と森本氏は説明する。

著者について



森本あんり氏

国際基督教大学学務副学長

Morimoto Anri_1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学 (ICU) 人文科学科卒。プリンストン神学大学院博士課程修了 (組織神学)。国際基督教大学牧師、同大学教授を経て、2012年から現職。著作に『ジョンナサン・エドワーズ研究』『アメリカ・キリスト教史』『アメリカの理念の身体』など。

ドワイト・ムーディー、ビリー・サンデーなど、時代が下っても反知性主義的な伝道者は次々と登場するが、これらの伝道者たちは実業でも成功したり、伝道事業をうまくビジネスに結びつけたりした。「彼らは自分たちのビジネスがうまくいくのは、信仰が篤く、神が祝福してくれるからだ」と説いた。信者も彼らを真似て、同様のビジネス行動を取るようになります」。ここに大企業を忌避する反権威志向が加わり、信仰とベンチャー志向、ビジネス志向が手を結ぶ。

ポジティブ思考も、反知性主義の流れから生まれてくる。「誰でも信仰に目覚め、まじめに生きれば救われる」という米国的福音メッセージはまさに前向きであり、1950年代にはノーマン・ヴィンセント・ピール牧師の唱えるポジティブ思考が全米を席卷。それが現代へと続いている。

米国人と仕事をしたり、米国生まれの概念を活用したり、人事の仕事も米国とは切っても切れない関係だろう。宗教の側面から、彼らの考え方の背景に迫れる一冊といえる。



『反知性主義
アメリカが生んだ「熱病」の正体』

著者／森本あんり
新潮選書 1404円 (税込)
2015年2月刊行